

第一問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。

現代におけるボランティアにまつわる言説やイメージの一つとして、無償性というものがある。それは、ボランティアの要素としてあげられるほど重要な条件であると考えられている。

「これ、ボランティアでやっている」「ボランティアをお願いします」というとき、私たちは「これ、報酬をもらわないでやっている」「無料でお願いします」と同義で使っている。つまり、ボランティアとは無償の、場合によって自己犠牲を伴う活動として捉えられている。

私たちは行為の代価として一般に金銭的な見返りを期待している。労働が典型的な例で、私たちは働いたらそれに見合うだけの給料をもらうことを期待し、要求する。そうすることによって、労働者と雇用主との間にキン^アコウが保たれ、労働・雇用という関係が継続していく。

一方で、ボランティアは、行為の代価を求めないという意味でまさに「無償」の活動なのである。そして、無償であるから、ある社会的な価値を得ている。では、いったい無償の行為というのは、何によって関係が継続していくのであろうか。喜びや優越感などの感情的なものが、無償の行為であるボランティアを支えているのであろうか。

ボランティアは金銭的代価を得てはいないが、行為に対して何らかの対価^ニ社会的価値を得ている。場合によっては、「ボランティアをして自分が成長した」とか「ボランティアとして助けにあって、逆に自分が助けられた」という言説が流布しているように、自己にとって価値があるものを得ているといえる。

つまり、無償性という表象で表される性質は、何も見返りを得ないということではなく、「金銭」との関係において特徴

づけられているのである。いいかえるならば、ボランティアをする側とそれを受ける側との間に「貨幣」が介入しないということを表している。逆に、有償ということは「貨幣」が介入するということである。したがって、ボランティアの無償性という表象が表す性質は、貨幣の性質を考えると明らかになるのである。

^A有償の相互行為を媒介する「貨幣」の特徴を簡単に見てみよう。貨幣の一番の特徴は、人間関係を抽象化するということである。人間関係の抽象化とは、人間を具体的に扱うのではなく、できる限り計算可能（注予測可能）なカテゴリーに分類し、そのカテゴリーが持っている想定される性質をイチリツイに当てはめて、操作できるようにすることである。たとえば、買い物という行為を考えてみよう。昔ながらの市場では、店の人はお客の個性や生活スタイルなどを理解し、今日はこれ買ってとか、今度はこれがおすすめなどとコミュニケーションを取りながら、販売という活動を行う。お客からすればその逆で、店主のことをよく知っていて、家族構成や癖などを知っている。価格というよりは扱う商品にその店主のパーソナリティが現れているために、その店に惹かれていたのである。そういう意味で、商品を介して人と人の具体的な関係が結び結ばれているといえる。

一方、一般的なスーパーマーケットでは買い物客と店の人とは、できるだけコミュニケーションを減らす方向に向かう。その方が効率的であるからである。いちいち値段を聞かずとも、調理方法を聞かずとも、商品を購入し、それを食べることもができる。「余計」な手間がかからないという意味で「楽」である。この「楽」を手に入れるために、お客は個性を捨て、年齢や性別でカテゴリーに分けられることを受容する。結果として、スーパーマーケットなど効率性を優先させた売り場では、具体的な関係よりも、個別の事情や性格などを□した抽象的な人間関係が優先されていく。買い物客は、具体的な人間というよりは、たとえば五〇代主婦というカテゴリーに分類され、そのカテゴリーが持つ性質を持った抽象的な存在となるのである。そうすることによって、スーパーマーケットの店員は、個別にコミュニケーションをとらずとも、お客の関心や購買行動を理解することができる。いいかえるならば、計算可能な存在にお客がなっているのである。

貨幣をこの例になぞらえるならば、スーパーマーケットでのお客と店員の商品の交換と同じ作用を引き起こすメディア（媒体）である。強制力が働かず、不平等が固定化されていない状態の交換は、通常、同等の価値を持ったもの同士をやり取りする。この交換においては、原理的には交換主体同士で価値を確認するコミュニケーションが必要となる。布一反と米一俵が同等であると、当事者同士で確認されれば、交換が成立する。

しかし、市場経済が発展すると、この価値の確認は非常に複雑になり、コミュニケーションにかなりの労力を必要とするようになる。布一反と野菜一キロが等価であれば、米一俵と野菜一キロが等価になるが、農家の人にとってはもしかすると野菜一キロは自給できるため価値のないものとして映るかもしれない。

このように価値をめぐるコミュニケーションが複雑になると、^ウカンジンの交換が滞ってしまう危険性がある。あるいは、コミュニケーションに権力が入り込み、不平等な交換を強要される可能性もある。そのために、価値をめぐるコミュニケーションをさまざまなコンテキストから切り離し、抽象化していく必要が生じる。いいかえるならば、できるだけコミュニケーションを減らし、効率化することが求められるようになるのである。そのメディアが貨幣なのである。

したがって、貨幣はもともと人間関係を抽象化したものであり、価値をめぐるコミュニケーションを減らす作用を持っている。たとえば、一時間働く^(注1)とどれくらいの価値があるかということ、従業員は雇用主とコミュニケーションすることは、八〇〇円^(注2)という貨幣によって表されることで十分だと両者は了解しているのである。なぜならば、コミュニケーションを減らしてくれる貨幣が両者の人間関係を媒介しているからである。

店とスーパーマーケットの例からわかるように、具体的な人間関係と抽象的な人間関係の一番の違いは、コミュニケーションの具体性の違いである。店では値段や商品選択の場面で、個別的でそれぞれの事情にに応じているという意味で具体的なコミュニケーションが行われている。一方、スーパーマーケットでは、お客と店員とのあいだのコミュニケーションはできるかぎり最小限にとどめられ、あったとしても商品の場所を聞いたり値段の確認をしたりする程度である。この例

からわかるように、人間関係が抽象化されるとコミュニケーションのありようが変わるのである。つまり、貨幣を介した人間関係では、結果としてコミュニケーションに対する要請が絶対的に低くなるのである。

話をボランティアに戻してみよう。無償性という言葉やイメージをボランティアが獲得しているということは、ボランティアのどのような性質に私たちが注目しているといえるのだろうか。無償性が貨幣と関係しているという点から考えるならば、人間関係におけるコミュニケーションのありように注目しているということである。有償の活動を支える貨幣は、人間関係を抽象化し、コミュニケーションを減らす作用を持っている。しかし、ボランティアが無償であるということは、活動のなかで行われるさまざまな交換においては、価値をめぐるコミュニケーションが避けて通れないということを意味している。いいかえるならば、「ボランティアが無償である」という言葉やイメージが流布しているということは、私たちはボランティアと呼ばれる活動において、コミュニケーションの必要性や重要性を確認しているといえるのである。

無償性という言葉やイメージを持っているボランティアにおける価値をめぐるコミュニケーションとは、いったい何であろう。この場合の価値は、貨幣に置き換わるものではない。それは、商品の購入の例で示したとおり、具体的に個別なものである。ある人にとってはとても価値があるが、他の人にとっては価値がない価値である。たとえば、「ボランティアをして、相手にありがとうと言われて嬉しかった」という言葉において、どのような価値をめぐるコミュニケーションがあったと推察されるだろうか。

ボランティアをした人は不安に思いながら、相手に何かをした。その何かしたことが、「ありがとう」という言葉を生み出したならば、その二人にとっては何らかの価値があったということが確認されたことを意味している。そして、その言葉を「嬉しい」と感じることで、自分の行為が、価値があったのだと認められたこと自体にも価値を見出している。このように行為や言説の価値の確認がそのつど行われること、つまりコミュニケーションの相互性こそが、貨幣に置き換わることのない価値をめぐるコミュニケーションのありようだといえる。

さらに、このコミュニケーションは、それぞれの行為のコンテキストに依存するために、誰にとっても同じ価値を持つと限らない。そういう意味で、その場限りのものである。それゆえ、そのつどそのつど当事者同士でコミュニケーションをとる必要がある、その継続的なコミュニケーションがボランティアをボランティアたらしめているのである。

現代では、貨幣が交換において浸透して、当たり前なものになっている。しかし、貨幣によって抽象化された人間関係が拡がるなかで、無償性という言葉やイメージを付与されているボランティアという現象に注目が集まっているのは、人間関係を抽象化しすぎたことに対するアンチテーゼであるといえるのではないだろうか。

(関 嘉寛「ボランティアから捉える現代社会——『近代』との関係から考える」による)

(注) 1 カテゴリー——範疇^{はんちゆう}。

2 コンテキスト——文脈。

3 八〇〇円——この文章が書かれた頃の最低賃金は、約八〇〇円だった。

4 アンチテーゼ——ある主張に抵抗して提出される反対の主張。

問1 傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のa～dのうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

アが 1、イが 2、ウが 3

ア キンコウ

- a 先輩のことばがキンセンに触れる
- b ヒキンな例で説明する
- c キンシユク財政に移行する
- d キンシツな空間を設定する

イ イチリツ

- a 宗教のカイリツを厳しく定める
- b 財源の強化策をジュリツすべきだ
- c 預金のリリツが想定を下回る
- d 事の重大さにセンリツが走った

ウ カンジン

- a 相手の悪事をカンパする
- b 事業のコンカンを支える
- c 初志をカンテツする
- d カンタン相照らす関係

問2

空欄

に入ることはとして最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は

4

a 捨象

b 形象

c 対象

d 具象

e 事象

問3 次に示すのは、傍線部A以降の内容に着目しつつ、生徒が貨幣の特徴について話し合いをしている様子である。これを読んで、後の(1)～(3)の問いに答えよ。

生徒A——筆者は、かつて、あるものとあるものが等価であるとみなせれば、貨幣を介在させることなく、もの同士の交換が行われていたと述べているね。そして、昔ながらの市場では、店の人は客の個性や生活スタイルなどを理解していたし、客も店主のことをよくわかっていて、買い物を通して人と人との関係ができていたんだね。

生徒B——ところが、市場経済が発展すると、それぞれのものの価値の確認はとても複雑になって、コミュニケーションも大変になる。交換が滞ってしまうことにもなりかねないよね。

生徒C——効率化を追求する現代は、貨幣が商品の交換の媒体となった。スーパーマーケットの店員は、客をできる限り計算可能な存在とみなしたいという意識が働く。そこで、買い物客は、**X**として扱われる。そうすれば、いちいちコミュニケーションをとらなくてもよくなるよね。

生徒D——一方で、客の側もその方が手間がかからないので個性を捨て、例えば高齢者や子育て中の母親といったカテゴリーに分類されることを受け入れるんだね。

生徒A——こうして、筆者は、買い物という行為を例にとりつつ、**Y**の変化についての主張を展開しているんだね。

生徒B——貨幣が介入することで、個別の事情や性格などを勘案しなくてすむのは、ある意味で効率的と言えるし、等価と認められないものの交換を強要されることも避けられるという効果もあるよね。

生徒D——なるほど。こうしたことから、**Z**ということなんだね。

(1) 空欄 **X** に入る発言として最も適当なものを、次の a ～ d のうちから一つ選べ。解答番号は **5**

- a ある特定のカテゴリーに分類され、売り手にとって関心や購売行動が理解しやすい抽象的な存在
- b ある特定のカテゴリーが持っている性質を加えられ、市場から操作されやすくなった受動的な存在
- c ある特定のカテゴリーに帰属するよう変化させられ、売り手が関係を結びやすくなる具体的な存在
- d ある特定のカテゴリーに振り分けられ、売り手と買い手の深い相互理解が可能となる理想的な存在

(2) 空欄 **Y** に入る発言として最も適当なものを、次の a ～ e のうちから一つ選べ。解答番号は **6**

- a 貨幣価値
- b 販売商品
- c 消費行動
- d 人間関係
- e 市場経済

(3) 空欄 **Z** に入る発言として最も適当なものを、次の a ～ e のうちから一つ選べ。解答番号は **7**

- a 貨幣が幅をきかすことによって、本来価値のある無償性ということに疑問を抱くようになる
- b 貨幣が人と人との媒体となることによって、コミュニケーションを行う必要性が少なくなる
- c 簡易化されたコミュニケーションによって、人間関係が円滑になる一方、人々の個性が失われる
- d 貨幣が人々に浸透することによって、市場経済が活性化し、客の購買意欲が高められる
- e 人々が貨幣に必要性を感じ重要視することによって、コミュニケーション能力が低くなる

問4 波線部「いったい無償の行為というのは、何によって関係が継続していくのであろうか」とあるが、筆者は「関係

が継続していく」ために、何が必要であると考えているのか。その説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **8**

- a ボランテニアをする人は、その価値について確信を得られないまま活動している。そのため、相手とコミュニケーションを行うことによって、貨幣に置き換えられない普遍的な価値を見出していくことが必要である。
- b ボランテニアには、無償であるという言説やイメージが浸透している。そのため、活動することで生じる社会的価値には、貨幣以上の価値があることを行為のコンテキストに即して相互に確認し続けることが必要である。
- c ボランテニアの価値は、具体的に個別なものであり、人によって意味が異なるその場限りのものである。そのため、当事者同士でコミュニケーションをとり、何らかの価値があったことをそのつど確認することが必要である。
- d ボランテニアという行為は、誰にとっても同じ価値を持つとは限らない。そのため、当事者それぞれがその活動に対してどのような価値があったのかということを随時考え、絶えず発信していくことが必要である。

問5 筆者は、ボランティアについてどのように論を進めているか。その説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **9**

ちから一つ選べ。解答番号は **9**

- a ボランティアの無償性について説明したうえで、ボランティアが貨幣に換算できない社会的価値を得ていると、いうことを例を挙げながら証明し、ボランティアに新たな存在意義を見出そうとしている人々を批判している。
- b ボランティアが現代社会において果たしている役割を説明したうえで、市場経済社会における貨幣の役割と比較検討し、ボランティアの無償性がコミュニケーションに及ぼしている功罪について論じている。
- c ボランティアが無償性にあることを示したうえで、有償の相互行為を媒介する貨幣の特質について説明し、ボランティアと貨幣の性質と対比させながらボランティアの価値について論じている。
- d ボランティアの無償性について批判したうえで、市場経済を進展させてきた貨幣の価値を指摘し、これからの社会において人々がボランティアにどのような価値を見出していくべきなのかについて論じている。

問6

本文の内容として筆者の考えに合致するものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **10**

- a ボランティア活動にまつわる無償性というイメージは、活動に金銭以外の価値も生じているということを強調するものであり、無償というボランティア活動においても金銭の授受を否定はしない。
- b 人間関係の希薄化に伴い人と人との対等な関係が失われたため、コミュニケーションによって同等の価値を持つ商品同士の交換ができなくなり、経済を発展させる媒体として貨幣の重要性が増した。
- c 人々が安易で効率的なコミュニケーションを優先した結果として、貨幣が介在する市場経済が発展することとなり、売り手と買い手という交換主体の平等な関係性が定着することとなった。
- d 無償性という言葉やイメージを付与されているボランティアという現象に人々が関心を寄せているのは、貨幣経済の発展による人の個性性に依拠したコミュニケーションの減少が要因となっている。

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、出題の都合上、本文を一部省略し、表記を変更した

箇所がある。

A
この前には哲学の方法である反省[、]ということについてお話しいたしました。今日は哲学のもう一つの方法である直観[、]について考えてみようと思いますが、その前に、前の講義の要点を申し上げますと、反省とは一方において自己批判、すなわち自己否定であるとともに、他方において自己肯定、つまり、存在の自覚であるということです。もう少し詳しく申し上げますと、反省とは、ただ自分がこうであるということだけで満足せず、なぜ[、]そうなのかと、その理由を自ら問うことです。そうして、そこに、自分を成り立たせているより、深い存在を見出すことなのです。それは、出発点であったはじめの自分を否定して、より、大きな自分を見出すことで、ここに存在の自覚が成立します。ここで私が特に強調しましたこと、それは存在の自覚ということでありました。すなわち、反省とか自覚とかいうことは、単なる意識の問題ではなく、存在の問題であるということです。こうして、哲学は抽象的に「存在とは何か」などと考えるのではなく、できるだけ現実的具體的な存在について考えるものとなります。そうして、その最も具体的な存在とは、歴史的社会的現実であるとするなら、「哲学とは時代批判の学である」と言えるのです。

なお、哲学の方法が「反省」であるということ、哲学の対象は「存在全体」であるということとは不可分のことで、全体の学であればこそ、反省という方法が要求され、反省ということによってのみ、存在の全体が対象となってくるのです。この点から言えば、哲学をこれから始めようとされる方は、どんな問題から始められてもいいのです。哲学は何から始めてもいいのです。何から始めても、それだけにとどまっていなくて、その思索がだんだん^{ひろ}広がって存在の全体に及ぶこと、あるいは及ばねばならぬところに「全体の学」としての哲学の特色があります。その意味では、哲学というものは、自分の身ぢかなところ、しかもあまりに身ぢかであるために、絶対に他人に代ってもらえぬほど自分一人の生々しい問題

から始めるのが、いいのではないかと私は思っております。しかし、その自分一人の問題は掘り下げることによって存在全体の問題となるのです。一言で言えば、「自分の問題は世界の問題であり、世界の問題は自分の問題である」というのが哲学の立場なのです。

この前の講義で私が言おうとしたのは以上のようなことでありました。ともかく反省とは単に事実の可能の根拠を理論的に考えるだけではないので、その反省を通して、新たな、あるいは、より深い、「存在」に触れることが必要なのです。そうしてそれを実現するものこそ直観というものです。しかし、果たして、そのようなことができるものか。いったい、直観とは何か、ここから私達の今日の思索は始まります。

今日の講義の結論を最初に申しますと、私は直観というものは可能であると思うのです。そうして哲学はこの直観によって、はじめてほんとうの哲学になると考えます。問題は、直観が可能かどうかということよりも、何を直観と呼ぶかという点にあります。それはこれから考えてまいります^Bが、普通、多くの学者は直観などというものは承認しないものです。それで、私はその人達が直観を認めないのはなぜかということから、話を始めたいと思います。

直観という言葉は、ほかの多くの言葉と同様、いろいろな意味をもっておりますが、ごく普通に使われているのは「ちよつと一目見るだけです[、]対象の本質を把^{つか}んでしまう認識能力」というような意味ではないかと思えます。例えば、将棋や碁で、次に打つ手を直観するとか、またはじめて会った人の人物人柄を一目で直観するとかいうのは、その意味です。ところが、科学者は一般的にそのような認識の確実性を信用しませんし、科学者でなくとも、少し合理的な精神をもっている人なら、誰でもそのような認識に疑いをもつのは当然です。実際、ものごとを正確に知るためには、問題となつてい^る対象の全体を、一度、部分にわけて細かく調べることが必要でありますし、また、時間をかけて、ゆっくりそれを研究すべきです。つまり、空間的にも時間的にも、イ^ツキ^ョに知るといふようなことは人間にはできないことなのです。このことは、認識能力のほうから考えてみてもわかることで、ものを知るにはまず感覚を働かせねばなりません^が、正しく知

るためにはその感覚を細かく、用心深く働かせねばなりません。また、ものを知るには、よく考えることが必要で、将棋の例でもわかるように、よく熟考してはじめてわかることを、それをしないで瞬間的に結論を出して、それが間違わないということも、少なくとも一般人にはできないことです。

そうして、さらに大切なことは、私達が直観という言葉を使う時には、何かもの本質を直観すると思うのですが、実際に私達が見ているのは、ただものの現れ、すなわち現象だけであって、その現象の奥にひそんでいる本質を捕えるというようなこともできないはずで、このように考えてくると科学者や、一般に知的な人々が直観などというものを承認しないのは全く正しいことなのです。私自身、今述べた意味においては、それらの人々の考えと全く同様であることを、ここにはつきりと申し上げておきます。

ところで、私はここに全く別の話をもち出そうと思います。今、私は話をしております。そうして、そのために口を動かしております。つまり身体を動かしております。では、その身体の動きは、どうして知られるか。口の例では動きが小さいですから、体全体の運動、例えばマラソンを例にとります。マラソンをしている人を眺めている見物人は、その選手がある時間にはどの地点におり、次のある時刻には、どこにいるというふうにして、その選手の運動を知るわけです。しかし、その運動を知るには、もう一つ別の方法があります。それは、走っている選手自身が息を切らして走りながら、自分で感ずる運動です。そうして、そこにこそ、身体的変化や、精神的苦痛の生々しい動きが実感されるはずで、

今、私が申しておりますのは、もちろん、マラソンのことが中心ではありません。ものを知るには二つの方法があるという点です。すなわち見物人として眺めるか、自分自身そのものとなって実感するか、ということ。もつと簡単に申せばものを知るには、外から見る方法と、内から知る方法とがあるということです。そうして、今述べたように考える限り、^c内から知るといふ知り方もあることは、誰にも承認されることと思えます。

ところで、このように内から知る知り方を私は直観と呼ぼうと思えます。しかし、直観とはただ内を見るところだけの

ことではありません。そこからして話がだんだん難しくなってくるのですが、まず気づくことは直観の対象となるものは、ものの空間的な現れではなく、その現れの奥にあって、それを可能にしているもの、つまり、原動力であるということですね。その原動力を生命力^{レヴィ}というか、時間^{レヴィ}というか、意識^{レヴィ}というか、あるいは精神^{レヴィ}というか、そこにはいろいろ問題がありますが、ともかく、動きそのもの、あるいは動きのもと（つまり原動力）は内から知られるものです。しかも、それは内から知られるだけではなく、内からでなければ、ほんとうには知ることができないものなのです。このことは逆に申せば、直観というものは、何にでも適用できるものではなく、物質とか空間とかいうものは、直観できないものなのです。水とか、ダイヤとか、蛋白質^{たんぱく}など、すべて物質は、それを部分にわけ、またそれを調べるのに時間をかけて、こつこつと研究する以外には、知りようもないものです。

ですから、先ほど申しましたような、ちょっと見てすぐ本質がわかるというような意味の直観は、やはり成り立たないのです。このことは認識能力の方から考えても同じで、知性や感覚を働かせてものを直観しようとしても、それはできないことなのです。しかし、ここに大切な問題がひそんでおります。というのは、感覚や知性を働かせても直観ができないということとは、直観というものが一般的に不可能ということではなく、感覚や知性で直観することはできないということなのです。直観が行われるためには別の能力が働かねばならないのです。それは何か。

私はそれを、皆様御承知の哲学者ベルグソン^{ベルグソン}に従って、sympathyと呼んでみたいと思います。sympathyは同情とか共感などと訳されますが、要するにそれは なものではなく、感情的あるいは情感的なものです。そうして、それとともに感ずることですから、結局、対象と一つになって、それを内から実感することです。ごく普通の意味でも、他人に同情するとは、ある事柄を、他人事^{ひとごと}、つまり他人のこととせず自分自身その人の身になってみることでありますが、今私達が言っている sympathy というのも、それなのです。それは対象と自分とが一つになって、キョウメイ^{キョウメイ}することです。自分自身そのものになり切って、そのものを内から実感するのが sympathy であり、直観です。それは、ちょうど、マラソンをし

ている人の走ってゆくのを、道路に立って眺めることではなく、自ら選手となって走りながら、その動きを実感することです。

しかし問題はそう簡単には片づきません。今、私達が取り上げているのは、実践ではなく、認識の問題です。そうして、認識となると、知性とか概念とかが必要ではないかと考えられるのです。ところが、直観は概念的認識ではありません。しかしそうになると、直観的認識では、学問とはならないのではないかと疑問が起きます。しかし、ここにこそ直観というものの本質があるのでありまして、私達はここで直観の非概念性を非難することをやめ、逆に概念というものを棄てる必要があるのです。私達は普通はものをほんとうに認識しているのではなく、すでにできあがっている概念でものを判断しているのです。例えば、自分の見ているものを、これは花であるとか、菊の花であるとか、あるいは白い菊の花であると、思ったり言ったりして、それで目の前の対象を認識したと思っております。しかし、これではただ対象をすでに自分もっている概念のどれかに入れるだけで、その対象のほんとうの姿をつかんだことにはなりません。ほんとうに物を知るとは、そのような^ウキセイの概念をぶちこわして、対象そのものと一つになることでなければなりません。直観はそこに成立するのです。

(澤瀉 ^{おもだか} 久敬 ^{ひさゆき} 『哲学と科学』による)

(注) ベルグソン——アンリ・ルイ・ベルグソン。フランスの哲学者（一八五九—一九四一）。

問1 傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のa～dのうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

アが **11**、イが **12**、ウが **13**

ア イツキヨ

- | | | |
|---|-------|---------|
| a | キヨ | エイ心を満たす |
| b | 提案をキヨ | ゼツする |
| c | キヨ | ヨウの範囲 |
| d | カイキヨ | を達成する |

イ キヨウメイ

- | | | |
|---|---------------|-----------|
| a | 親の教えを座右のメイとする | |
| b | メイ | シヨ旧跡を訪れる |
| c | 他国とメイ | ヤクを結ぶ |
| d | 大山メイ | ドウしてねずみ一匹 |

ウ キセイ

- | | | |
|---|-------|--------|
| a | カイキ | 日食を見る |
| b | ブンキ | 点となる |
| c | ジヨウキ | を逸している |
| d | キコウブン | を読む |

問2 空欄 に補うことばとして最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答番号は **14**

- a 画期的 b 実質的 c 論理的 d 総合的 e 神秘的

問3 傍線部A「この前には哲学の方法である反省、反省ということについてお話しいたしました。」とあるが、筆者の言う

「反省」についての説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は15

- a 自分の存在を自ら問うことによって、自分を成り立たせている深い存在を自覚すること。
- b 自分の現状を批判するだけでなく、より深く理解し具体的な未来像をイメージすること。
- c 自分の現状を把握することだけで満足せず、自己実現するための方策を模索すること。
- d 自分の存在を客観視することによって、不安や迷いをできる限り克服しようと試みることに。

問4 傍線部B「普通、多くの学者は直観などというものは承認しないものです」とあるが、学者が承認しない理由として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は16

として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は16

- a 学問は、対象について専門的な分析を行うことが重要であるため、時間をかけて研究することが必要だが、その前段階として全体を一瞬でとらえる認識能力が欠かせないと考えているから。
- b 学問は、対象について外から確認できる状態を把握する必要があるが、ものの本質をよく考えることも重要であるため、時間的、空間的な認知が不可欠であると考えているから。
- c 学問は、対象について様々な人の見方や感覚を理解することによってより深く知ることが重要であるため、どれだけ時間をかけても一人で行うことが不可能であると考えているから。
- d 学問は、対象について時間をかけてゆっくりと分析する必要があるため、一瞬で対象全体を俯瞰しその本質を正確にとらえることはできないと考えているから。

問5 傍線部C「内から知るといふ知り方もあることは、誰にも承認されることと思ひます」とあるが、「内から知る知

り方」についての説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は17

- a 身体の内側にある知性や感覚を発動させることによって、対象と一つになり本質が実感できるということ。
- b 時間や空間を超えて対象の性質をとらえようとすることによって、対象を真に認識できるといふこと。
- c 対象と一つになって実感することによって、空間的な現象の奥にある動きについて共感ができるといふこと。
- d 対象について自分と他者がもつ概念と照らし合わせることによって、自分の概念を理解できるといふこと。

問6 次に示すのは、授業で本文を読んだ後の、話し合いの様子である。これを読んで、後の(1)～(3)の問いに答えよ。

生徒A——筆者は、哲学の方法としての「反省」がどういふものかということにまず述べて、それを実現する方法として「直観」について説いているんだね。

生徒B——筆者は、「直観」は可能であると言っているけど、ここで言う「直観」はごく普通に使われている意味とは異なるんだよね。

生徒C——一般的な意味で使われる「直観」、すなわち「ちょっと一目見るだけですぐ対象の本質を把握してしまう認識能力」ということとは違うよね。

生徒D——こうした「直観」に対しては、筆者も科学者と同様に疑いをもっている。筆者が例に出している将棋においても、ものごとを正確に知るには、Xと考えているんだよね。

生徒A——これから大学に進学して学ぼうとしている私たちには、「直観」は必要ないのかな。

生徒C——そんなことないと思うよ。この文章で筆者は、「ほんとうに物を知る」には、「直観」の非概念性に着目してYこと必要性を説いている。こうすることで、これまでの考え方を鵜呑みにせず、批判的に考え、新しい考え方を導くことができるんだね。

生徒B——また、哲学の方法としての「反省」と共感ということに合わせて考えると、Zことも学問になるんじゃないかな。

生徒C——そうだね。目に見えない繋がりを考えていくということは、例えば、生命について考えるうえで大切かもしれないね。

(1) 空欄 **X** に入る発言として最も適当なものを、次の a ～ d のうちから一つ選べ。解答番号は **18**

- a 生まれながらにして持っている才能を磨くことが必要
- b 瞬時に正解を導けるよう熟考する経験を重ねることが必要
- c 五感を磨き自分の感覚を研ぎ澄ませることが必要
- d 他の人の考え方にたくさん触れていくことが必要

(2) 空欄 **Y** に入る発言として最も適当なものを、次の a ～ d のうちから一つ選べ。解答番号は **19**

- a ものごとに対するとらえ方を見直し、対象そのものと一つになる
- b 数多くの経験を積み、目の前の対象と他の対象との違いを認識する
- c 自分が見ている現象と真剣に向き合い、ほんとうの姿をつかむ
- d 対象を緻密に観察し、すでに自分もっている概念に正確にあてはめる

(3) 空欄 **Z** に入る発言として最も適当なものを、次の a ～ d のうちから一つ選べ。解答番号は **20**

- a 自分自身の存在について掘り下げることによって、世界全体に通じるものがあることを模索する
- b 自分自身の存在に満足することなく、他者の共感を得られる存在へとなるよう実践を重ねていく
- c 自分自身を研究の対象として客観的にとらえ、身体や精神を分析しながら研究をすすめていく
- d 自分自身の存在を批判的かつ否定的にとらえ、他者と比較しながら理想の存在について探り続ける